

蠟梅

池松 孝子

この時期、近所を歩いているとあちろちらの庭で蠟梅を目にする。冬の高い青空を透かして、黄色の花が光り輝いて見える。日脚が少し延びてきたかなと感じる頃に、蠟でコーティングしたかと思紛うようなこの花の質感は珍しい。

東京府中市にある「府中市郷土の森博物館」は蠟梅の名所として知られている。久しぶりに訪ねると、まだまだ寒い日にもかかわらず、冬の花、そしてその甘い香りを楽しむ人達が三々五々歩を進めているのに出会った。ある時、そこで話したグループの一人から、蠟梅は漢方薬として水戸藩主が輸入したものだと言われた。咳止めや解熱作用があって重宝されたという。その後、種を神社、武家屋敷などに植えたことから全国に広まったそうだ。あの青空と黄色の取り合わせは、花の少ない時期だからこそ喜ばれたことだろう。

蠟梅の差す日燦々寒に入る

阿部 ひろし

蠟梅の咲き始めは二枚の花弁が重なっていて、花が開くにつれて花弁は透明に近づいていく。その名は臘月（旧暦の十二月）に咲くからともいわれる。柔らかい日差しの中のほんのりと石鹸のような香りは堪らない。

あの夏目漱石も蠟梅を好み『永日小品』で蘭の花の香に似ていると記している。蠟梅は早春の花、万作よりもずっと早くに咲く。晩冬の季語でもある。中国では梅、山茶花、水仙と合わせて「雪中の四友」呼び、古くから水墨画の画題としてよく登場する。

日本での蠟梅の歴史はさほど古くないようで、江戸時代初期に中国から渡来したという。カイバラ越権益軒が『花譜』や『大和本草』に、「この花の容かたちはよくない」と書いている。益軒にとつては、歴史のある梅のように姿、形の整った枝ぶりのほうが好ましかったのだろう。そういわれてみると、確かに花をつけた蠟梅は、その「容姿」と言うか、木全体の姿は劣る。

蠟梅の種は自然には落下しない。このことから受験シーズンには「落ちない」種としてお守りに摘んで行く人もいるそうだ。